

『莊子』テキスト変遷の考察

黄 華 珍

(要旨) 關於《莊子》書演變的考察

《莊子》是一部影響深遠的著名古籍。其內容廣泛，思想深奧，亦有不少晦澀難懂之處，故被稱為中國的一部“奇書”。

據《經典釋文·序錄》等記載，歷史上《莊子》書曾分別有過五十二篇本，二十七篇本和三十三篇本。可是，流傳至今的《莊子》書僅有後一種。已經不復可見的前兩種《莊子》書成了莊學中難解之謎。已故武內義雄教授曾對此作了許多有益的探討，並依據《莊子音義》中出現的崔、向注弄清了二十七篇本的篇名。

本文試圖在武內教授等先賢研究的基礎上，根據《莊子音義》等資料進一步分析，探討《莊子》書的演變過程，並力求揭開最早著錄於《漢書·藝文志》的《莊子》五十二篇本的面紗。

ま え が き

『莊子』研究の諸分野に於て，もとのテキストの実態如何は古來残された大きな問題の一つである。

通説によれば，『莊子』の内篇は莊周の自著であり，外・雜篇は莊周の門人や後輩の作であるとされる。また『莊子』の若干の篇は偽作であるとする説⁽¹⁾も現れた。このような説は長期間に亘って莊學の研究に大きな影響を与えてきた。しかし，『莊子』の内篇・外篇・雜篇をよく検討すれば，内篇は莊周の自著であると見るべき有力な証明がないし，他方外篇・雜篇はそのすべてを莊周の門人や後輩の作と見なすべき根拠もないのである。その逆に，内篇に新しいものが入っている可能性や，外篇・雜篇に古いものが混入している可能性がある。従って，これまでの通説は適當ではないと断言できる⁽²⁾。実際には『莊子』は一人により一時に完成されたものではなく，複数の作者によってそれぞれに書かれて次第に集成されたものである。これについては『莊子』の内容を仔細に考察するならば，知られることである。

『漢書』藝文志の記載によれば，『莊子』五十二篇あったとされる⁽³⁾。『呂氏春秋』卷十四に見える高誘注にも『莊子』五十二篇との言及がある⁽⁴⁾。しかるに，『經典釋文』に収める『莊子音義』を含む現在世上に流伝している『莊子』は三十三篇のみである。すでにこの世から姿を消した五十二篇の『莊子』とは一体どのようなものか，その実態はこれまでのところ殆ど明らかにされていない。

本文は『莊子』のテキストの変遷、特に五十二篇本の原型について、先学の研究を踏まえた上で、『莊子音義』・『經典釋文』「序録」等に見られる資料によって探求してみたいと思う。

一 『莊子』の篇立て

さて、ここでひとまず『莊子』は戦国末期より漢初に亘って成立したものと考えた場合、テキストとしての『莊子』の原初の姿は一体どのようなものであったろうか。『史記』に記載された「十餘萬言」⁽⁵⁾の『莊子』は、恐らく篇名は付してなく、かなり乱雑なものであったろう。その点について、木村英一⁽⁶⁾が次のように述べている。

別録を存してゐる他の書物の例、例へば『荀子』、『晏子春秋』、『戦国策』……等の例によって考へると、おそらく異同や重複の多い乱雑な數種のテキストで、全體としてみれば雜然たる記録の集合であつたであろう。従つて『史記』の「其著書十餘萬言」は、蓋しその様なテキストの一つであつたと見られる。

とはいえ、蘇軾の「分章名篇出于世俗、非莊子本意。」⁽⁷⁾という判断はほぼ間違いない、と思われる。五十二篇本の整理者については、若干の異説があるけれども、漢に劉向（約前七七～前六年）・劉歆（？～二三年）父子が書物を整理したと伝えることを考えるならば、恐らく唐蘭によって想定された劉向説は最も有力であろう。

唐蘭著「老聃的姓名和年代考」⁽⁸⁾は次のように述べる。

……内篇和外篇、雜篇の分別是從那裏來的呢？我以為這分別是起於劉向刪除複重的時候。我們且看「管子書録」：『中外書五百六十四篇，以校除復重四百八十四篇，定著八十六篇。』「晏子叙録」：『凡中外書三十篇為八百三十八章，除復重二十二篇六百二十八章，定著八篇二百一十五章。』「孫卿書録」：『凡三百二十二篇以相校除復重二百九十篇，定著三十二篇。』從這幾個例裏，可以看出來，凡著録於「別録」的古子書，都經過他的刪除重複的手續，才成為『漢書』藝文志上所得的篇數，『莊子』當然是在這例內，所以我這個假設大半是靠得住的。

唐蘭説の他、武内義雄が主唱する淮南王の門下によって整理されたとする説⁽⁹⁾もある。もしも五十二篇には淮南王と関係ある「淮南王莊子要畧」等を含むならば、その可能性が絶対ないとは言いきれまい。しかし、今までのところ有力な証拠がない。また、この問題を判断する時、漢の図書整理の歴史は無視できないであろう。

劉向父子が「經傳諸子詩賦」を校したことについては、『漢書』藝文志⁽¹⁰⁾に次の記載が見られる。

漢興，改秦之敗，大收篇籍，廣開獻書之路。……建藏書之策，置寫書之官，下及諸子傳説，皆充祕府。至成帝時，以書頗散亡，使謁者陳農求遺書於天下。詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦，……每一書已，向輒條其篇目，撮其指意，録而奏之。會向卒，哀帝復使向子侍

『莊子』テキスト変遷の考察

中奉車都尉歆卒父業。歆於是總群書而奏其七略，故有輯略，有六藝略，有諸子略，有詩賦略，有兵書略，有術數略，有方技略。今刪其要，以備篇籍。

以上の資料から、劉向が一冊の書物を整理し終わるたびに、「その篇目を條し、その指意を撮し、録してこれを奏」したことが知られる。勿論、劉向によって撰された書録は全部は世上に伝わらなかったために、『莊子』書録が元来あったかどうかについては、すでに知るを得ない。ただし、劉向によって撰された、また現在なお見られる他の書録には莊周に言及したものがある。『孫卿書録』に「鄙儒小拘，如莊周等又滑稽亂俗」（『史記』孟子荀卿列傳にも同じ内容が見られる）とあり、『列子書録』に「且多寓言，與莊周相類」とあり、『関尹子書録』に「辭與老莊異，其歸同」とある。この三例の中、『関尹子書録』は後世の偽作とする説があるものの、他の『孫卿書録』及び『列子書録』はやはり信じ得る資料であろう⁽¹¹⁾。この二資料のみによっても劉向が『莊子』のことをよく知っていたことが明らかであるとするれば、劉向その人が最も原初の『莊子』を整理し、且つ篇名を付けたのであろうと想像できる。

しかるに、『史記』⁽¹²⁾には次のような記載がある。

其著書十餘萬言，大抵率寓言也。作漁父・盜跖・胠篋，以詆訾孔子之徒，以明老子之術。畏累虛亢桑子之屬，皆空語無事實。

これを見れば、劉向より早い司馬遷（約前145または同135～？年）の記載はすでに若干の篇名に言及している。ただし、内・外・雑篇の別については全然言及されていない。しかもいずれも外・雑篇に含まれる篇名を挙げ、内篇は無視された恰好である。従って、その時代にあっては内・外・雑篇の別はまだ出来ていなかった、と推測できよう。もしも当時その別がすでに存在したならば、『史記』に内篇の篇名が挙げられたはずである。なぜならば、通常内篇は最も重要視される部分であるわけで、莊周の学を説明する時それに全く言及しないとすれば異常であろう。勿論、司馬遷が莊子の説の「孔子の徒を詆訾し」「老子の術を明らかにする」性格を強調するために、その趣旨を強く持つ漁父、胠篋、盜跖の篇名を挙げた可能性はあろう。しかし、それとて単に推測の域を出ず、内・外・雑篇の分け方が当時既に存在していたかどうかは証明出来ない。とすれば、恐らくその時代に篇名はまだ全部付けられていなかったし、内・外・雑篇の分け方もまだ生まれていなかったと考えるべきであろう。

これに関して、『莊子音義』齊物論篇には「崔云，齊物七章，此連上章。而班固説在外篇。」との記述がある。それによれば、遅くとも班固（三二～九二年）の時代には内・外篇の分け方がすでに出ていた、と判断できる。従って、司馬遷と班固との間にあって他の誰かが『莊子』を整理したことになる。時代を考えれば、この仕事に最も適当な人物としては、劉向のほかにはまず見当たらない。現在知られる限りの資料によれば、漢代における『莊子』に関わる人物は僅かである。班固はただ齊物論篇の施注者の一人に過ぎず（後述）、内・外篇の

分けかたが班固に始まる可能性はまずない。また班固の時代内・外篇の分けかたがすでに存在したとすれば、そのあとの魏晋時代の人物によって分けられた可能性は最も薄いであろう。

なお、漢の時代には、『晏子春秋』内篇、外篇⁽¹³⁾、また『淮南』内二十一篇、外三十三篇⁽¹⁴⁾等の例がある。いずれも、劉向によって『莊子』が整理された傍証と見なし得る。

ところで、漢の劉向によって整理された『莊子』五十二篇本は夙に佚したので、その実態はすでに知り得ない。しかし、曾てそれが存在した事実は疑問を容れない、と思われる。『經典釋文』「序録」には司馬彪・孟氏注は即ち『漢志』に記載された五十二篇本であると明記され、また『呂氏春秋』の高誘注⁽¹⁵⁾にも『莊子』五十二篇本に言及しているから、確かに漢から西晋にかけて世に流布した『莊子』のテキストは主に五十二篇本であった、と判断される。

現存の三十三篇本の構成を検討すると、劉向が五十二篇本を整理・編集した時、恐らく年代によってではなくその文章の趣旨に基づいて編成したのでであろう、と推断出来る。三十三篇本に見られるように、多数の篇は一篇のうちに古いものと新しいものとを混在させている。それは恐らく劉向によって編集された時にそうなったものであろう。

五十二篇本の後、崔譔、向秀によって注を施された二十七篇本があった。さらにこの二十七篇本を受け継ぎ、西晋の郭象によって三十三篇本が整理された。これらの篇立ての変遷の経緯はここで略し、ただ時代の流れに沿って篇立ての変遷の経緯を示せば次のようになる。

十餘萬言（司馬遷の時代）→五十二篇本（前漢後期→西晋）→二十七篇本（西晋）
→三十三篇本（西晋→今日）

上に見られる通り、最後に定着された三十三篇本は、即ち現在でも世に流布している郭象によって整理されたテキストである。これを司馬彪注の五十二篇本と較べると、十九篇の差がある。もっと細かく言えば、司馬彪本は郭象本より外篇十三篇、雜篇三篇、解説三篇だけ多い。この差については、文献に確実の記載は見られないので、現在までに佚した篇に関する事は知られないものが多い。宋の王應麟撰『困学紀聞』⁽¹⁶⁾から数えれば、数百年来、多数の研究者はその佚した篇名を解明するために精力を注いだが、解明に至らないものが依然多く残っている。これもこの問題の複雑性を現わしているのであろう。

二 『莊子音義』に言及された『莊子』のテキストについて

『莊子音義』には「一本」、「俗本」、「永和中本」、「宋元嘉中本」、「元嘉本」、「簡文本」、「崔本」、「向本」、「崔向本」、「司馬本」等、それぞれのテキストを示すことばが絶えず見える。それは『莊子』のテキストを理解しようとするときの参考資料になる。ここでは若干の例のみを挙げる。

『莊子』テキスト変遷の考察

- ①「一旦——宋元嘉中本作一日。」(胠篋)
- ②「而不相往來——一本作不相與往來。檢元嘉中郭注本及崔向永和中本並無與字。」(胠篋)
- ③「取君子小人於其間哉——崔本無小人於三字。」(駢拇)
- ④「雖通如楊墨——一本無此句。」(駢拇)
- ⑤「嚆矢——崔本此下更有，有無之相生也，則甚曾史與桀跖生有無也，又惡得無相穀也。凡二十四字。」(在宥)
- ⑥「程生馬馬生人——俗本多誤，故具錄之。」(至樂)
- ⑦「加病——如字。元嘉本作知病。崔本作駕，云加也。」(庚桑楚)

以上に言及された「一本」，「俗本」，「簡文本」，「崔本」，「向本」，「崔向本」，「司馬本」の原物はすでに佚したものの，それから何を指しているかはまだ容易に判断できるといえよう。因みに，「宋元嘉中本」と「元嘉本」とは同一のテキストを指すものとおぼしい。「元嘉」とは南朝の宋文帝（劉義隆）の元号（四二四～四五三年）であったから，その時に出了たテキストを指すのであろう。

ところで，「永和中」というのはなかなか判断しにくい。『中国歴史紀年表』⁽¹⁷⁾によれば，「永和」とは，後漢の順帝（劉保）の時（一三六～一四一年），東晋の穆帝（司馬聃）の時（三四五～三五六）年），後秦の姚泓の時（四一六～四一七年），北涼の沮渠牧犍（茂虔）の時（四三三～四三九年）に使われた元号である。仮に向秀の生卒年（約二二七～二七二年）から推定すれば，ここの永和中は恐らく東晋の穆帝の時を指すのであろう。

以上の資料によっても，『莊子』が成立してから，多数のテキストによって世に流布したことがわかる。また，それらのテキストは全く同じではなく，少なくとも文字に多少の異同を生じていたことが知られる。

全体を見れば，一字異同（例えば，「旦」と「日」など）の場合は，恐らく伝抄の際書き手が書き誤ったかもしれないが，一段落異同の場合は施注者の誰かが勝手に改竄したか，或いは意識的に書き直した可能性が大きかろう。特に注目されるのは，陸徳明の注に崔本，司馬本の文字に異同があるという注記が何か所か見られることである。それは郭象が三十三篇本に再編成するに当たり，一部分の文字を調整したことがあった証左であろう。

三 『莊子音義』に言及された『莊子』各篇及びその内容などの変遷

『莊子音義』には『莊子』の篇立ての変化や文字の有無については言及した注が見える。以下に若干の例を挙げる。

- ①「夫道未始有封——崔云，齊物七章，此連上章。而班固説在外篇。」(齊物論。前出。)
- ②「夫子——司馬云，莊子也。一云老子也。此兩夫子曰元嘉本皆為別章。崔本亦爾。」(天地)

③「天運——司馬作天員。」(天運)

④「凡君——俗本此後有孔子窮於陳蔡及孔子謂顏回二章，與讓王篇同。衆家並於讓王篇音之。檢此二章無郭注，似如重出，古本皆無。謂無者是也。」(田子方)

上記の資料はそれとはっきり書いたものではないが、『莊子』の原貌・原型を探求する時の手掛かりになる，と思われる。

①の齊物論に見える「夫道未始有封——崔云，齊物七章，此連上章。而班固説在外篇。」という注に対しては，学界には二つの解釈がある。

その一，この段落は班固本或いは班固の見得たテキストが外篇にあったことを表わす。——馬敘倫⁽¹⁸⁾，武内義雄⁽¹⁹⁾，王叔岷⁽²⁰⁾等多数の学者はこの説を主唱する。

その二，この段落は班固本或いは班固が見得たテキストが外篇にあったことを示すものではなく，単にこの段落は外篇にあるはずだと班固が主張していることを表わす。——蔣錫昌『莊子哲学』⁽²¹⁾は「“班固説在外篇”者，乃言班固本此章亦在本篇，但班固驗之於義，以為應在外篇也。馬（敘倫）謂今本非『漢志』之次第，實屬誤解崔（謨）意。非是。」（「班固は外篇に在ると説く」とは，すなわち班固本では此の章も本篇にあることと言う。しかし班固は論理的に考察した上で，外篇にあるべきだと考えたのである。今本は『漢志』の次第（順序）ではないと馬（敘倫）は考えたが，實は崔（謨）の言われたとする意を誤解したもの，当を得ていない。」）と述べた。池田知久もこの説を提唱する⁽²²⁾。

実はこの箇所注には陸徳明が司馬本のことに全然言及していないため，どちらに解釈しても司馬本の理解には影響を与えない。つまり，司馬本のこの段落は現在の通り内篇にある。

ところが，この二説はそれぞれの異なる結論を導き出すはずである。前者によると，班固本は司馬本と同一のテキストではない。後者によると，班固本は司馬本と同一のテキストということになる。この問題の解明は『莊子』の全体の篇立てと繋がっているのも，もし『莊子』が三十三篇本になった歴史を考えるならば，「班固説在外篇」という句の解釈は後者の説の方が穏当であろう。それにはただ班固の主張が表われているまでで，この段落が必ず外篇にあったという表現ではあるまいと思われるからである。なお，武内義雄が指摘した，班固注の出現するところに司馬注を見受けない⁽²³⁾というのは，ただ一一五字の範囲であり，もし段落或いは章の単位で考えるならば，崔・向注と司馬注とはともに見受けられるはずであることが確認された。この問題を説明するために，班固注に関する段落の内容及び崔・向注と司馬注とをそのまま引用してみよう。

夫道未始有封（崔云，齊物七章，此連上章，而班固説在外篇。），言未始有常，為是而有畛也。請言其畛，有左，有右（崔本作有，在宥也。），有倫，有義（崔本作有論，有議。），有分，有辯，有競，有争，此之謂八德。六合之外，聖人存而不論。六合之内，聖人論而不議。

春秋經世先王之志，聖人議而不辯。故分也者，有不分也。辯也者，有不辯也。曰，「何也。」
「聖人懷之，衆人辯之以相示也。故曰，辯也者，有不見也。」（以上は武内が指す段落であり，その限りでは確かに司馬注は見受けないけれども，この後に後文が緊接している。）
夫大道不稱，大辯不言，大仁不仁，大廉不嗾，大勇不忮。道昭而不道，言辯而不及，仁常而不成，廉清而不信，勇忮而不成。五者^園（崔音，劓。司馬云，圓也。）而幾向方矣。故知止其所不知，至矣。孰知不言之辯，不道之道。若有能知，此之謂天府。注焉而不滿，酌焉而不竭，而不知其所由來，此之謂葆光（崔云，若有若无謂之葆光。）故昔者堯問於舜曰，「我欲伐宗，膾，胥敖（司馬云，宗，膾，胥敖三國名也。崔云，宗一也，膾二也，胥敖三也。），南面而不釋然。其故何也。」舜曰，「夫三子者，猶存乎蓬艾之間。若不釋然，何哉。昔者十日并出，萬物皆照，而況德之進乎日者乎。」

上に見られるように，「夫道未始有封……而況德之進乎日者乎。」は一つの章をなし前文が後文に繋がっているのである。これを武内説のように前半分を切りとるのは，適当ではあるまい。前文の一一五字の範囲に司馬注を見受けないのは単なる偶然の現象に属しよう。従って司馬本にこの部分の有無を判断するに当たっての根拠にはなし得ない。

前文に言及したように，班固は後漢の人である。彼が『莊子』に注を施したとする記載は古典に見受けないけれども，『莊子音義』齊物論には彼と関係のある注は四条見出された。その内容は次の通りである。

ア．大塊——衆家或作大塊。班固同。

イ．夫道未始有封——崔云，齊物七章，此連上章。而班固説在外篇。（前出）

ウ．恂——班固作恂也。

エ．天倪——班固曰天研。

これらによって，班固が『莊子』齊物論に注を施したことがあり，しかも崔譔と司馬彪は彼の注を見たことがある，と推断できる。従って，班固は『莊子』のテキストの整理者ではなく，ただその一篇に注を施した人物であろうと思われる。であるとすれば，彼が用いたテキストには大きな変動はあり得ないであろう。恐らく班固と司馬彪と二人ともに同じく五十二篇本のテキストを用いていた，と推定される。

ところで，上記の①②④の資料とも「章」に触れている。このような例は『莊子音義』にまだ多数見られる。これらによると，『莊子』のテキストは元もと「章」に分けていたことが知られる。

②番はただ章の分けかたを説明しているようであるが，それはテキストの内容の異同ではなく，ただ文章の構成またはその意味の理解の異同であろう。しかし，④はテキストの調査をした上で，俗本と他のテキストとの異同を指摘すると共に，「似如重出，古本皆無」との結論を導き出した。これは陸徳明が『莊子音義』を書いた時のテキストに対しての真摯な態

度を示すものと言える。

③の「天運——司馬作天員。」という注は、『莊子音義』中に唯一はっきりと言及された司馬彪本と郭象本との間に存在した異なる篇名である。天員の「員」は、馬叙倫によれば「運」の仮借であるという⁽²⁴⁾。残る三十二篇の篇名は『莊子音義』には全然言及されていないで、それらは全部司馬彪の五十二篇本に用いられた篇名であったことを暗示するものとして認識すればよからう。そうなると、この注は五十二篇本の原型を推定する上での極めて重要な資料であると言わなければならない。

四 『經典釋文』『序録』及び他書に見える篇構成変遷の手掛かり

『莊子』の篇立ての変遷については、『經典釋文』『序録』及び他の書物にも若干の資料が見られる。それは古今の研究者によって繰り返し引用されたものではあるが、『莊子』のテキストの変化を検討するに当たり不可欠の資料になる。ここで現在知り得る限りの資料を摘記しながら、検討を加えてみよう。

①「序録」には、

莊生……依老氏之旨，著書十餘萬言，以逍遙，自然，無為，齊物而已，大抵皆寓言歸之於理，不可案文責也。然莊生宏才命世，辭趣華深，正言若反，故莫能暢其弘。致後人増足漸失其真，故郭子玄云一曲之才妄竄奇說。若闕弈，意脩之首，危言，游鳧，子胥之篇，凡諸巧雜，十分有三。『漢書』藝文志『莊子』五十二篇即司馬彪，孟氏所注是也。言多詭誕或似『山海經』或類似占夢書，故注者以意去取……

とある。ここに言及された闕弈，意脩，危言，游鳧，子胥の五つの篇名の信憑性は高いと思われる。なぜならば、それには次のような若干の傍証があるからである。

最も重要なのは、日本京都の高山寺所藏舊抄『莊子』卷子本⁽²⁵⁾天下篇末における郭象の「後序」に「序録」と同じ篇名に言及した箇所である。その原文は次の通りである。

若闕亦（弈），意脩之首，尾（危）言，游易（鳧），子胥之篇，凡諸巧雜，若此之類，十分有三。或牽之令近，或迂之令誕，或似山海經，或似夢書，或出淮南，或辯形名。

これを「序録」の内容と対比して見るならば、両者の文字に多少の異同があるけれども、おおむね同じである。年代から考えれば、勿論「序録」は「後序」から取ったものであろう。また、次の二条の資料も参考にできる。

ア.『文選』⁽²⁶⁾卷二十二顔延年「車駕幸京口詩」李善注に「闕弈之隸與殷翼之孫遏氏之子，三士相與謀致人於造物，共之元天之上。元天者，其高四見列星。司馬彪曰，元天，山名也。」とある。

イ.『太平御覽』⁽²⁷⁾五百三十に「游島（鳧）問黃雄曰，今逐疫出魅，擊鼓呼噪何也……」とある。

以上によると、闕弈・游鳧は間違いなく篇名であることが確認出来る。残っている意脩，

危言、子胥に関する資料は現在でもこれ以上見られないままであるが、「後序」「序録」ともに見られるので、佚篇の篇名として認識するとしても大過あるまい、と思われる。

「危言」は高山寺『莊子』卷子本の郭象「後序」に「尾言」とするが、武内氏は『莊子』寓言篇に見える「卮言」によって「尾言」を「卮言」に改めた⁽²⁸⁾が、妥当とはいえない。「序録」には「危言」に作る。「尾」と「危」と音が近いので、「序録」によって「危言」とすればよかろう。

「子胥」は伍子胥の名で作った篇名であろうと推測出来る。その名は現在の『莊子』至樂篇、盜跖篇に見られるが、三ヶ所とも章の首に置いていないし、該当の章の中心内容にもならないようである。従ってもとの子胥篇がこれらのいずれかに当たるかどうかは確認出来ない。馬叙倫は『莊子義證』所収「『莊子』佚文」に「文選」廣絶交論の注にある「夫差瞑目東粵。」⁽²⁹⁾を引き、「疑此為音義所謂子胥篇文」と指摘している。恐らくそれも周知の呉王夫差と伍子胥との関係を考えて上で推断したものであろう。

ところで、「序録」及び高山寺本郭象の「後序」に基づいて郭象によって削除された五十二篇本の状況が説明できる。二つの資料を比較して見れば、文字に異同はあるけれども、基本的内容が一致している。しかも、「後序」の方は「……或出『淮南』，或辯形名。」の若干の文字が増えている。これらによって、郭象が削った内容は恐らく「或似『山海經』，或似〔占〕夢書，或出『淮南』，或辯形名。」の範囲に当ろう、と推断できる。しかし、更に具体的なものとなるともはや知るを得ない。『莊子音義』に見える司馬注、また『文選』等に散見する司馬注の分量によって推測するに、三十三篇本と五十二篇本との範囲は余り変わらないようであるが、『史記』の「十萬言」は実数であるか概数であるか、「序録」及び「後序」の「十分有三」に対してどう理解する方が適切であろうか。私見では、現在の『莊子』三十三篇本の分量は約六萬五千字あり、篇数では十九篇少なくなっており、もしも「十萬言」が概数であり、即ち厳密な数値でなければ、分量・篇数とも減ったのはざっと十の三に当たると解釈できよう。

②『史記』⁽³⁰⁾に、

莊子……作漁父・盜跖・胠篋以詆訾孔子之徒，以明老子之術。畏累虛亢桑子之屬，皆空語無事實。

とある。「畏累虚亢桑子……」という句に対しては、従来異なる理解がある。それを検討するため、まず同じ唐時代の二説を摘記してみよう。

ア. 司馬貞『史記索隱』⁽³¹⁾に次のように述べる。

按：『莊子』「畏壘虚」，篇名也，即老聃弟子畏累。……郭象云，今東萊也。亢音庚。亢桑子，王劭本作庚桑。司馬彪云，庚桑，楚人姓名也。

イ. 張守節『史記正義』⁽³²⁾に次のように述べる。

『莊子』云，庚桑楚者，老子弟子，北居畏累之山。成瑨云，山在魯，亦云在深州。

此篇寄庚桑楚以明至人之德，衛生之經，若槁木無情，死灰無心，禍福不至，惡有人災。言「莊子」雜篇庚桑楚已下，皆空設言語，無有實事也。

二説とも有力な根拠を挙げていない。ただ文意文脈によって解したものであろう。そのため、いずれの説が正しいとも言えない。

司馬貞は、字子正，河内（今の河南沁陽）の人。開元（唐の玄宗の元号，七一三～七四一年）初年，国子博士，宏文館學士を歴任した。世に“小司馬”と称ばれる。

張守節の略歴は不詳，ほぼ司馬貞と同時，開元の中葉頃の人で，曾て諸王侍讀率府長吏に任ぜられた⁽³³⁾。

同時代の人物によって施された注でありながら，なぜ異説を生じたのか，不思議である。もしも司馬貞が五十二篇本を見たことがあるのであれば，どうして張守節はそれが見られなかったであろうか。さらに考えれば，「畏累」についてはこの二人より早い唐初の成玄英（貞觀五年，即ち六三一年都に入る）も山の名であると注する⁽³⁴⁾。彼もまた五十二篇本を見たことがないのであろうか。しかも，『莊子音義』にも「李⁽³⁵⁾云，畏累，山名也。或云在魯，又云在梁州。」という注釈が見える。成玄英と陸徳明との存命年代は最も近く，また『莊子』の專注があるから，『莊子』の事情をよく知っているはず，時代から考えても，やはり成玄英の注と陸徳明に引用される李注は最も信じ得るものであろう。

恐らく『索隱』の作者は『史記』原文の前句に漁父，盜跖，臯篋の篇名を挙げているのを見て，その影響を受けた上で解釈したのが上の結果かもしれない。畏累虚という文字は現存の篇には庚桑楚篇のみに見られる。その篇の文意で解釈すれば，畏累虚は篇名ではなく，老聃の弟子の庚桑子が住んでいる山の名前である。私見では，『史記』の作者がそれに言及した目的は，庚桑子及び庚桑子が住んでいる畏累山はすべて「空語無事實」を説明するに在ろう。このように解釈するならば，比較的自然而あるし，文意もそこなわれない。ただし，『正義』の「雜篇庚桑楚已下……」という解釈は妥当とは思われない。なぜならば，前文に検討した通り，『史記』の時代には，内・外・雜篇の分け方はまだ立っていなかったからである。因みに，近人の壽普暄著「由經典釋文試探莊子古本」も『正義』の説を取っている⁽³⁶⁾。顧頡剛⁽³⁷⁾，瀧川龜太郎⁽³⁸⁾，王叔岷⁽³⁹⁾とも畏累虚は篇名ではないと考えている。

③『北齊書』杜弼傳⁽⁴⁰⁾に，

弼注「莊子」惠施篇，『易』上下繫，名『新注義苑』，並行於世。

とある。ここに言及されている「弼注『莊子』惠施篇」については，『新注義苑』という書物は『隋志』などに記載されていないので，今日のところその内容は考証の限りでない。しかし「惠施篇」と明記されているので，『莊子』の佚した篇名である可能性が大きい，と思われる。しかも，現在の『莊子』には惠子の名がしばしば出てくる。特に天下篇の最後の段落（「惠施多方……悲夫。」）には惠施を論じた文が見られる。『莊子音義』の調査結果によるならば，天下篇の全篇に見られる司馬注は30回あるが，この段落だけには25回程現れ，非常

に集中している。従って、これは惠施篇に当たるとする説が恐らく正しいのであろう。

④『南史』何子朗傳⁽⁴¹⁾に、

子朗……嘗為敗冢賦，擬莊周馬捶，其文甚工。

とある。孫志祖『讀書脞錄』はこれによって『莊子』の佚篇の一つであると認めた⁽⁴²⁾。しかし、その「敗冢賦」はすでに佚したので、内容を知るを得ない。「篇」と明記されていないので、「馬捶」の二字のみで篇名かどうかは判断しにくい。現在のテキストには、「馬捶」の二字は現行の『莊子』至樂篇に一ヶ所しか見られない。この篇に見られる崔・向注と司馬注の都合によれば、一篇となすには差し支えがなかろう。しかし、これを『莊子』の佚篇の一つであるとする説に反対する意見もある⁽⁴³⁾。

要するに、以上の検討を通じて篇名であろうと思われるのは、闕弈、意脩、危言、游鳧、子胥、惠施、馬捶のみである。しかし、これらの佚篇が内・外・雑篇のどちらに当たるのか、現在まで解明するに足る資料はまだ発見されていない。もしも通常の考え方に立てば、内篇は最も重要な内容であり、しかも「序録」に「衆家竝同」と明記されているので、郭象によって削除されたこれらの佚篇が内篇に属したはずはないと考えられる。恐らくやはり外・雑篇に配せられたものであろう。

ところで、「序録」によれば、司馬彪本は郭象本より十九篇多い。その中に「解説三」が含まれる。それは「淮南王畧要」と「淮南子莊子後解」に当たるとする説は武内義雄著『老子と莊子』⁽⁴⁴⁾に見られる。そして、それを解明する方向に向かった楠山春樹著「淮南王莊子畧要・莊子後解考」にも貴重な見解を示した⁽⁴⁵⁾。

「淮南王畧要」は『莊子』の佚篇であると夙に想定したのは清の兪正燮である。彼はその撰に係る『癸巳存稿』第十二卷⁽⁴⁶⁾「『莊子』司馬彪注集本跋」に於て次のように述べた。

『文選』謝靈運「入華子岡詩」，江文通「擬許詢詩」，陶淵明「歸來去詞」，任彦昇「齊竟陵王行狀」注並引「淮南王莊子畧要」「江海之士，山谷之人，輕天下細萬物而獨往者也。」又引司馬彪曰「獨往任自然不復顧世。」則彪本五十二篇中有「淮南王畧要」，或『漢志』五十二篇為淮南本入秘書讎校者……

もう一つの「淮南子莊子後解」については兪正燮は言及しなかったが、『文選』張景陽「七命」注⁽⁴⁷⁾に次の記載がある。

『莊子』曰、「庚市子肩之毀玉也。」「淮南子莊子後解」曰、「庚市子，聖人無慾者也。人有爭財相鬪者，庚市子毀玉於其間而鬪者止。」

これらによると、二つとも『文選』の李善注に見られるものであるが、『莊子』の佚篇であるか否かについてはまた論議がある。沈欽韓『漢書疏證』は「淮南子莊子後解」は『淮南子外書』の佚篇であると考えている⁽⁴⁸⁾。王叔岷もまた『莊子校釋』に於て兪正燮の説に反対し、次のように述べている⁽⁴⁹⁾。

兪正燮『癸巳存稿』一二因謂，彪本五十二卷中有「淮南王畧要」，或『漢志』五十二篇

為淮南王本，為秘書讎校者。岷謂「莊子畧要」乃「淮南子外書」之逸篇（「淮南子」今僅存內書二十一篇，外書已亡），以解說「莊子」者非「莊子」五十二篇本有此篇也。司馬彪注云云，乃為「莊子」文作注，非為「莊子畧要」作注，特「文選」注於此未引「莊子」文耳。如「文選」張景陽「七命」注……（略）。既引「莊子」文，又引「淮南王莊子後解」，可證「莊子後解」，當亦「淮南子外書」之逸篇，與「莊子畧要」同例。據此則「莊子畧要」“江海之士”云云，乃「淮南子」逸篇之文。

楠山春樹は“「略要」の佚文の淮南王賓客のものではあり得ない”ことを主張し，しかも「略要」と「後解」については次のように述べた⁽⁵⁰⁾。

この書（略要）はいつの時代にか何人かによって，淮南王の名に託して作られ，莊子の巻末に附せられていたのが，司馬彪によって解説としてそのまま採り入れられ，五十二篇の中に数えられるに至ったのではなかろうか。その成立がいつということは判らないが，しかし，こうした仮託の書が作られそうなのは，「莊子」の書に対する関心の度合から推して，やはり魏晋のころと見るのが妥当であろう。一方，「後解」については，よるべき資料をまったく欠いているが，唯だ一つ残された佚文の形式から推して考えると，「莊子」の記事に対して，いわばその肉付けとも裏付けともなるような説話を各種の書から集め，それを一本にまとめ上げた，というようなものであったろうか，と思われる。そして，「略要」の例から推すと，これも恐らくは仮託に成るものであり，もし然りとすれば，その時期はやはり魏晋のころと考えるのが妥当であろう。なお，これが「略要」と同じく，司馬本にいう解説三の中に含まれていたかどうか，これは判断を保留せねばならない。

この問題は甚だ複雑なので，結論は急がない方がよかろう。しかし，二つの注とも「莊子」の原文を引いており，また「後序」には「或出「淮南」」という記載もあるから，「莊子」の佚篇となんらかの関係があると想定しても大過あるまいと考えられる。もしも二つとも「莊子」に編入されたならば，何時出来たものかについては，楠山春樹が「司馬彪の以前からあったものを彼が利用したとも考えられるが，或いは彼自身が偽作したのである，とも解せられよう。」との見解を示している⁽⁵¹⁾。しかし，「序録」の「『漢書』藝文志「莊子」五十二篇，即司馬彪孟氏所注是也。」という記載を合わせ考えれば，楠山説の正確性に疑問を生じる。それというのも，陸徳明の時代にあっては司馬彪・孟氏のテキストはまだ見られたわけで，もし司馬彪のテキストが従来のもので大きな異同があったならば，陸徳明がそれについて注を施さなかった可能性があるか否かは問題であるからだ。「經典釋文」全書の風格を見れば，それはあり得ないようである。「莊子音義」に最も多く収められた諸家注は司馬彪の注であるので，陸氏は司馬彪のテキストの内容については詳しいはずである。司馬彪，孟氏によって施注されたのが「漢志」に著録されたテキストと一致するという結論も勝手なものではなかろう。いずれにせよ，「解説三」に関する資料や手掛かりは少ないので，その結論はまだ下されるに至らないのである。

『莊子』テキスト変遷の考察

以上述べたのは数百年にわたる現在までの先学の研究結果の要約に筆者の私見を加えたものである。簡単明瞭にするために、それを五十二篇→二十七篇→三十三篇の流れにそって、次の表にまとめてみる。異説をも収めたいので、異論があるものは「？」で示すこととする。

『莊子』テキスト篇構成の演變一覽表（一）

五十二篇の篇名（「序録」等による推定。内篇七，外篇二十八，雜篇十四，解説三。）	
〔一〕 内篇七（「序録」に「衆家竝同」の記載がある。） 逍遥遊，齊物論，養生主，人間世，徳充符，大宗師，應帝王。	七
〔二〕 今本の外篇に収められたもの（三十三篇本との差による推定。） 駢拇，馬蹄，胠篋，在宥，天地，天道，天運，刻意，繕性，秋水，至樂，達生，山木，田子方，知北遊。	十五
〔三〕 今本の雜篇に収められたもの（三十三篇本との差による推定。） 庚桑，徐无鬼，則陽，外物，寓言，讓王，盜跖，説劍，漁父，列禦寇，天下。	十一
〔四〕 解明された外・雜篇に当たる篇名（「序録」，『北齊書』等による推定。） 闕奕，意脩，危言，游鳧，子胥，恵施。	六
〔五〕 異論のある佚篇の篇名 (1) 外・雜篇に当たるもの（『南史』，『史記』による。） 馬捶（？），畏累虚（？）。 (2) 解説に当たるもの（『文選』の注等による。） 淮南王畧要（？），淮南子莊子後解（？）。	二 二
〔六〕 不明ままの篇名 外・雜篇に当たるもの 解説に当たるもの	八 一

『莊子』テキスト篇構成の演變一覽表（二）

二十七篇の篇名（『莊子音義』による推定。内篇七，外篇二十。）	
〔一〕 今本の内篇に収められたもの 逍遥遊，齊物論，養生主，人間世，徳充符，大宗師，應帝王。	七
〔二〕 今本の外篇に収められたもの 駢拇，馬蹄，胠篋，在宥，天地，天運，繕性，秋水，至樂，達生，山木，知北遊。	十二
〔三〕 今本の雜篇に収められたもの 庚桑，徐无鬼，則陽，外物，寓言，盜跖，列禦寇，天下。	八

『莊子』テキスト篇構成の演變一覧表（三）

三十三篇の篇名（現在の通行本による。内篇七，外篇十五，雜篇十一。）	
〔一〕内篇七 逍遙遊，齊物論，養生主，人間世，德充符，大宗師，應帝王。	七
〔二〕外篇十五 駢拇，馬蹄，狀箴，在宥，天地，天道，天運，刻意，繕性，秋水，至樂，達生，山木，田子方，知北遊。	十五
〔三〕雜篇十一 庚桑，徐无鬼，則陽，外物，寓言，讓王，盜跖，說劍，漁父，列禦寇，天下。	十一

上記の三つの表に見られるように、『莊子』テキストの篇構成の変遷は非常に大きかったので、多くの学者が大変な努力を傾注したが、篇名のみと言え、異論があるものをも含む闕弈、意脩、危言、游鳧、子胥、惠施、畏累虚（?）、馬捶（?）、淮南王畧要（?）、淮南子莊子後解（?）の十篇を現在の三十三篇本に加えれば、合わせて四十三篇となり、手掛かりが全く掴められないままのは残り九篇となる。

ところが、佚した篇名であろうと推定したものでも実は依然謎が残っており、その範囲や内容の知られないものが多い。現在まで発見された限りの資料によれば、五十二篇本を完全に復原することは困難である。これが現実であることは認めなければならない。この研究を進ませるため、先学たちは色々な方法で検討を試みた。例えば、武内は崔・向注の出現する篇を調べた結果、その二十七篇の篇名を明らかにした。司馬注については武内が全面的に調査したか否かは公表されたことがないため不明である。ただし若干の篇名について言及されたことはある。それにも拘らず、武内の調査方法は依然有益有効である。先学の研究を踏まえ、『莊子音義』に収められた司馬彪注と崔・向注との異同を調査分析した上ならば、五十二篇本に関する問題について、ある程度の推定は可能であろう。実に筆者はその両注を全面的に調査したが、紙幅の関係上、その結果の言及を次回に譲る。

ところで、『莊子』の思想を研究するためには、『莊子』テキストの成立の歴史を辿って、劉向以前の『莊子』の古本を探求することが必要である。しかし、それと『莊子』五十二篇本の研究とは同一の問題としては扱われたい、と思われる。勿論両者は関係があるけれども、必ずしも重ならない。なぜならば、前述した如く劉向がそのテキストを整理した時に、それぞれの成立時間によって編集したとは考えられないからである。恐らくその内容（趣旨）によって整理した可能性が大きいであろう。また郭象によって整理された三十三篇本も事情は同じだと思われる。この点については、ある篇には古いものもあれば、比較的新しいものもあるという実情が丁度その証明になろう。現在の三十三篇本に収められた内容は遅くとも漢

『莊子』テキスト変遷の考察

の劉向以前に成立したと認められるから、それは劉向が五十二篇本を整理した時にすでに存在したものであると想定される。そのため、『莊子』五十二篇本を復元しようとするに当たり、各篇の成立年代にも触れざるを得ないが、再編の絶対条件として扱うわけにはいかないのである。

結 語

以上の検討を通じて、『莊子』テキストの変遷をめぐる若干の問題は次のようにまとめた。

- (一) 『莊子音義』に見られる資料によれば、歴史上複数の『莊子』のテキストが世に流通した。それらのテキストは全く同じではなく、内容や章や文字に多少の異同がある。

全体を見れば、一字異同の場合は、恐らく伝抄した時の書き手の誤写であったかもしれないが、一段落異同の場合は施注者の誰かが勝手に改竄したか、或いは「以意去取」意識的に書き直した可能性が大きいであろう。特に注目されるのは、陸徳明の注に崔本、司馬本の文字に異同があるという説明が何か所があった点で、それは郭象が三十三篇本に編成するに当たり一部分の文字を調整したことがある証左であろう。

- (二) 『莊子音義』『經典釋文』『序録』等の資料によれば、『莊子』のテキストの篇立ての変遷事情は五十二篇本→二十七篇本→三十三篇本の流れが確認できるが、五十二篇本については未解明の問題点が少なくない。

宋の王應麟によって撰された『困学紀聞』から数えれば、数百年以来、多くの研究者は『莊子』の佚篇を解明するため、精一杯の努力を払ったが、解明できないものが依然沢山残っている。これもこの問題の複雑さを現わしているのであろう。篇名のみに限れば、『經典釋文』『序録』と高山寺本の「後序」と共に言及した闕弈、意脩、危言、游鳧、子胥の五つは傍証があるので、篇名であるかは確認できる。惠施、馬捶(?)の二つは現行の三十三篇本には当たるところがあるので、武内等の先学の説は恐らく間違いがなかろう。畏累虚(?)は恐らく篇名ではなかろう。淮南王畧要(?), 淮南子莊子後解(?)の二つは資料不足なので、結論が下されるに至らないが、私見を記せば、二つとも司馬注が見られるから、佚篇である可能性を完全には排除出来ない。

もしも以上の十篇(異論のあるものをも含む)を全部三十三篇本に入れれば、合わせて四十三篇となり、手掛かりが全く掴められないままのは残る九篇となる。

- (三) 佚篇の篇名であろうと推定されたものでも、その範囲や内容は知られないものが多い。現在まで発見された限りの資料によれば、五十二篇本を完全に復原すること

は困難である。この研究をさらに進ませるためには、先学の研究を踏まえて、『莊子音義』に収められた司馬彪注と崔・向注との異同によって五十二篇本に関する問題についてはある程度の推定が可能となろう。しかし、『莊子』テキストの成立の歴史を考えるならば、劉向以前の『莊子』の古本の探求と五十二篇本の研究とは関係があるものの、同一の問題としては対応できない、と思われる。

注

- (1) 蘇軾『東坡先生全集』卷十一「莊子祠堂記」(明刊本)を参照。
- (2) 池田知久『老莊思想』(放送大学教育振興会, 一九九六年三月)を参照。
- (3) 『漢書』(中華書局, 一九七五年四月)卷三十「藝文志」を参照。
- (4) 『諸子集成』所収高誘注『呂氏春秋』(中華書局, 一九九〇年八月)卷十四必己篇を参照。
- (5) 『史記』(中華書局, 一九七五年三月)卷六十三を参照。
- (6) 木村英一「莊子妄言一則」(『石濱先生古稀記念東洋學論叢』, 一九五八年)を参照。
- (7) 前出注(1)を参照。
- (8) 唐蘭「老聃の姓名和時代考」(『古史辨』第四冊, 香港太平書局, 一九六三年二月)を参照。
- (9) 武内義雄『老子と莊子』(岩波書店, 昭和五年七月)を参照。
- (10) 前出注(3)を参照。
- (11) 『瓊本叢刊』(浙江省立圖書館, 民国十八年十月)を参照。
- (12) 前出注(5)を参照。
- (13) 『諸子集成』所収張純一『晏子春秋校注』(中華書局, 一九九〇年八月)を参照。
- (14) 前出注(3)を参照。
- (15) 前出注(4)を参照。因みに、『諸子集成』所収莊遠吉本『淮南子』卷十九脩務篇高誘注には「莊子, 名周。宋蒙縣人。作書廿三篇, 為道家之言。」と見える(『四部叢刊』所収北宋小字本は廿三篇を三十三篇に作る)が, それは後人が妄り改めたのであろうという(前出注(2)池田説を参照)。
- (16) 王應麟『困学紀聞』(明萬曆癸卯吳獻台重刊本)を参照。
- (17) 方詩銘『中国歴史紀年表』(上海辭書出版社, 一九八二年十月)を参照。
- (18) 馬敘倫『莊子義證』(『無求備齋老列莊三子集成補編』所収, 成文出版社有限公司據民国十九年上海商務印書館排印本影印)を参照。
- (19) 前出注(9)を参照。
- (20) 王叔岷『莊子校釋』(台聯國風出版社, 一九七二年三月)を参照。
- (21) 蔣錫昌『莊子哲学』(上海書店, 一九九二年十二月)を参照。
- (22) 前出注(2)を参照。
- (23) 前出注(9)を参照。
- (24) 前出注(18)を参照。
- (25) 日本高山寺藏『莊子』古鈔本(日本昭和七年東方文化学院影印本)を参照。
- (26) 『文選』(上海古籍出版社, 一九九二年七月)を参照。
- (27) 『太平御覽』(中華書局, 一九八五年十月)を参照。
- (28) 前出注(9)を参照。

『莊子』テキスト変遷の考察

- (29) 前出注(18)を参照。
- (30) 前出注(5)を参照。
- (31) 前出注(5)二一四四ページ所収『史記索隱』を参照。
- (32) 前出注(5)二一四四ページ所収『史記正義』を参照。
- (33) 瀧川亀太郎『史記會註考證』(史記會註考證校補刊行會, 昭和三十一年二月), 『文献学辞典』(江西教育出版社, 一九九一年一月)「史記索隱」「史記正義」の条を参照。
- (34) 唐成玄英『南華真經疏』(藝文印書館『無求備齋莊子集成初編』所収清光緒十年刊『古逸叢書』影印本)を参照。
- (35) この「李」は李頤であるか李軌であるかは判断し難いが, それは大きな問題とならない。なぜなら, 二人とも晋の人であるわけで, 当然司馬貞, 張守節より早い人物である。李頤, 李軌の略歴については, 『經典釋文』「序録」を参照。
- (36) 壽普暄「由經典釋文試探莊子古本」(『燕京學報』第二十八期)を参照。
- (37) 顧頡剛「莊子外雜篇著録考」(『古史辨』第一冊, 香港太平書局, 一九六二年十一月)を参照。
- (38) 前出注(33)『史記會註考證』を参照。
- (39) 王叔岷『史記劄證』(中央研究院歷史語言研究所專刊之七十八, 一九八二年六月)第七冊を参照。
- (40) 『北齊書』(中華書局, 一九七三年四月)卷二十四, また『北史』(中華書局, 一九七四年十月)卷五十五をも参照。
- (41) 『南史』(中華書局, 一九七五年六月)卷七十二を参照。
- (42) 孫志祖『讀書脞録續編』卷三「莊子逸文」(清刊本)を参照。
- (43) 前出注(36)を参照。
- (44) 前出注(9)を参照。
- (45) 楠山春樹『道家思想と道教』「淮南王莊子略要・莊子后解考」(平河出版社, 一九九二年七月)を参照。
- (46) 兪正燮『癸己存稿』第十二卷「莊子司馬彪注集本跋」(清光緒刊本)を参照。
- (47) 前出注(26)を参照。
- (48) 沈欽韓『漢書疏證』(江蘇廣陵古籍刻印社, 一九九一年三月)卷二十五を参照。
- (49) 前出注(20)を参照。
- (50) 前出注(45)『道家思想と道教』二八一ページ, 二八六ページを参照。
- (51) 前出注(45)『道家思想と道教』二八七ページを参照。

(本論文は94年6月二松学舎大学大学院に提出した学位論文の一部分です。)